【研究ノート】

近世都市における「子供」の埋葬比率

——教区簿冊の初歩的分析から——

中野　忠

はじめに

「ヴィクトリア時代末に至るまでのわれらが祖先には，いつでも若い子孫がいたのだと考えておかねばならない。工業化以前のイギリスでは，子供のいる世帯が全体の70%にも達しており，一世帯当たりの同居の子供の数は2.5人から3人程度だった。……工業化以前の世界では，至るところに子供がいた。」[1]　イギリス近世社会史に大きな影響を与えた名著のなかで，ラスレットは前工業化社会の特徴の一つについてこう書いた。高齢化社会に急速に向かいつつある現代先進国社会と対比すれば，「子供の溢れた社会」は，前工業化社会を特徴づけるもっとも鮮明なイメージの一つであろう。人口構成からごく大雑把に見ても，15歳未満の子供は総人口の三分の一，25歳未満の子供と若者はおよそ半分を占めていたと推定されている。[2]　一つの社会の全体像を捉えるには，この大きな人口集団を無視してすますことはできないだろう。

歴史における「子供」は——もう一つの大きな人口集団，「女性」とと

1)　Laslett (1983), p.119；ラスレット(1986)，161ページ。

2)　リグリーとスコフィールドの推定したこの時代の年齢構成は，次の通りである。

年	0～4歳	5～14歳	15～24歳	25～59歳	60歳以上	平均余命
1581	13.5	21.1	16.4	41.4	7.6	41.7
1601	12.3	20.6	19.5	39.5	8.3	38.1
1621	12.8	20.7	18.2	40.3	8.0	40.0
1641	11.8	20.5	17.3	42.1	8.3	33.7

Wrigley and Schofield (1981), p.528 より抜粋。

もに――近年著しい展開を見せつつある社会史，家族史研究がもっとも精力的に取組んできているテーマの一つである。歴史人口学もまた，「失いし世界」の子供について多くの貴重な成果をあげてきた。とりわけ教区簿冊の大量利用と家族復元に代表される新しい分析方法は，子供を含めた人口や家族に関わる諸々の問題について，それまでには想像できなかったほどの精度の高いデータと分析を大量に提供してきている。ケンブリッジ・グループによる『イングランド人口史 1541―1871年：一つの復元』[3] はその記念碑的成果といってよかろう。

家族復元による教区簿冊の分析は，他の資料を併せて用いることによって，人口学的な，あるいは家族史に関わるきわめて正確な統計的データ――初婚年齢，出生間隔，出産力（子供数），年齢別死亡率等など――を与えてくれる。しかし周知のように，洗礼，結婚，埋葬の記録を「名寄せ」していくこの方法は，膨大な時間と労力を要する作業であり，小さな農村教区ならともかく，人口が1万を超えるような集団についてこれを行なうことは，不可能ではないにしても，容易な技ではない。しかも家族復元がとりわけ有効性をもつのは，移動の少ない「閉じた」教区――住民の大半の誕生もしくは結婚から死までを追跡することができる――に関してである。これに対し，都市は規模が大きいだけでなく，一般にその移動性もきわめて高く，家族復元による分析の成果はかならずしも払われた労力に報いうるほどのものとなる保証はない。[4] そのためもあって，家族復元による教区簿冊の分析は，リグリーとスコフィールドの大著も含め，農村に大きくウェイトが偏っている。

だが家族復元法ほど正確な分析は不可能だとしても，より単純な集計的分析によっても，教区簿冊からはある程度有益な情報を得ることがで

3) Wrigley and Schofield (1981).
4) 家族復元の方法については，安元(1981)，特に5-8ページ；グベール(1992)，特に第1章を見よ。

きる。家族復元のむずかしい大きな都市については，まずこうした初歩的な分析によって問題に接近してみるのも一つのやり方であろう。本稿の直接の目的はごく限られたものである。すなわち，16世紀末から内乱前までのイングランド北部の一都市ニューカスル・アポン・タインの教区簿冊，特に埋葬簿を用いて，[5] 近世都市における子供に関する基本的問題の一班を論じてみることである。

(一)

ニューカスルはこの時期，8000人から1万5000人程度の人口を抱える，イングランドでは5指に入る都市であった。[6] しかも石炭産業の興隆とともに，この時代から繁栄を謳歌する有力な地方都市の一つだったことはよく知られている。[7] 4つの教区からなるこの都市の教区簿冊は残念ながら，もっとも古い聖ニコラス教区のものでも1576年からの記録しかなく，しかも特に疫病流行時の記録は脱漏が多く，けっして良質の資料とはいえない。にもかかわらず，この資料的欠陥を認めた上で，経済史上に占めるこの都市の特異な意義を考えれば，——それに代わる良質な資料がきわめて乏しいこともあって——この教区簿冊の分析は試みるに値する。

欠陥ばかりあげつらうのは公平でないだろう。この都市の埋葬簿は，聖ニコラス教区を除いて，埋葬される成人男子の職業をかなり大量に記録している。これについては別に検討した。[8] だが埋葬簿からはそれ以外にもいくつかの情報を得ることができる。一つは男性と女性の性比で

5） ここでは教区簿冊の原本ではなく，ニューカスル中央図書館に所属されているその転写を用いた。
6） 人口規模の簡単な推定値については，Howell (1967), pp.6-9; Corfield (1976), pp.220-3 をさしあたり参照。
7） Howell (1967), chap. I; 中野 (1995), 第1, 2章。
8） 中野 (1995)，第4章。

ある。職業名が記されているのは原則として成人男性と思われる者のみだが，それ以外の埋葬者についても様々な添え書きが付されているのが通例である。例えば，「貧民（poor）」，「･･･の妻（wife）」，「未亡人（寡婦）（widow）」，「･･･の子（child）」，「息子（son）」，「娘（daughter）」，「少年（boy）」，「女子（少女）（girl）」，「乳幼児（infant）」といった言葉である。女性であってもまれには「奉公人（servant）」とか「糸紡ぎ工（あるいは独身女性）（spinster）」，といった職業を連想させる付記がなされている場合もある。本稿の直接の分析対象となるのは，これらのうち「子供」に関するものである。[9)]

次葉の第１表は，欠落の多い聖アンドルー教区の除く三つの教区について，これらの付記にしたがって（主なもののみ）年々の埋葬数を分類したものである。

この表を一見してまず得られる印象は，これら添え書きのそれぞれの数が時期ごとに非常に偏っている，ということである。教区牧師たちは明らかに，これらの添え書きを厳密な基準にそって首尾一貫して書き分けたのではなかった。もっとも顕著な例の一つは，「(乳)幼児」である。このinfantという用語は一般に１歳未満の「乳児」を指す。しかしこの都市の教区牧師は，通例は，これを特定の年齢層の子供を指す限定された意味の用語として用いたとは思われない。例えば，聖ジョン教区の「infant」の埋葬数は1589年から97年の９年間は年平均18.5人であるのに，それ以後は年平均わずか2.1人が記録されているにすぎない。この時期にこれだけのオーダーの「乳児死亡率」の低下が突然生じた，と考えるのはまったく非現実的な推論であろう。1598年以降，「infant」の埋葬はそれ以外の添え書きのある被埋葬者，特に「息子」「娘」のなかに含まれていることはほぼ疑いない。

9） 女性については稿を改めて検討する。

第1表　ニューカスル3教区の「子供」の埋葬数

年	埋葬数総計			「息子」son			「娘」daughter			「子」child			「乳幼児」infant		
	(N)	(J)	(A)	(N)	(J)	(A)	(N)	(J)	(A)	(N)	(J)	(A)	(N)	(J)	(A)
1576	37			4			8			2					
1577	27			4			3			0					
1578	40			3			12			0					
1597	35			10			5			2					
1580	29			4			5			3					
1581	57			9			6			6					
1582	39			13			1			1					
1583	39			10			5			1					
1584	46			11			14			2					
1585	44			14			7			1					
1586	36			3			6			3					
1587	104			7			9			3			10		
1588	40	47		10	10		2	10		1	1		7	1	
1589	144	360		3	45		6	78		12	6		19	40	
1590	47	43		3	7		0	9		6	0		12	7	
1591	38	65		1	9		0	10		0	2		21	12	
1592	49	63		2	8		4	8		0	2		16	19	
1593	37	60		0	5		1	9		0	0		17	22	
1594	36	49		1	3		5	1		0	4		13	26	
1595	49	66		3	9		9	8		1	2		17	14	
1596	84	148		0	20		0	25		4	6		37	13	
1597	69	173		5	23		2	24		5	4		14	13	
1598	50	74		2	13		4	14		1	0		17	8	
1599	44	52		6	17		4	14		0	0		11	1	
1600	48	39		12	8		5	7		0	0		18	3	
1601	38	38	97	5	12	32	4	14	34	0	0	0	13	1	2
1602	30	47	87	1	10	28	0	11	18	0	0	0	8	4	9
1603	53	57	139	14	19	25	14	15	10	0	0	0	1	4	37
1604	66	82	179	18	22	32	13	17	29	0	2	4	3	0	10
1605	62	58	102	15	9	28	11	10	25	0	0	0	0	4	2
1606	54	73	130	20	15	25	13	19	33	0	1	3	0	0	2
1607	44	45	98	13	12	13	12	9	21	0	0	0	3	0	4
1608	61	75	116	13	15	20	11	15	14	0	0	0	5	6	6
1609	71	77	154	20	21	31	22	17	40	0	4	0	3	0	13
1610	63	169	315	9	39	77	10	33	68	0	4	1	9	7	12
1611	48	87	131	8	22	28	8	15	17	0	1	0	3	1	8
1612	52	75	108	0	21	16	0	11	22	0	0	0	29	1	4
1613	52	98	154	0	21	31	0	16	26	0	0	0	14	2	2
1614	39	61	130	0	13	34	0	9	24	2	1	0	9	0	4
1615	50	94	141	0	19	29	0	20	32	0	3	0	19	1	1
1616	65	95	161	0	22	36	0	21	19	0	3	0	21	1	1
1617	51	81	174	3	12	43	1	16	33	0	3	0	19	1	0
1618	57	76	121	0	17	34	0	15	26	0	1	0	19	2	0
1619	60	90	207	0	30	50	0	25	57	2	0	0	31	0	3
1620	60	54	175	0	10	53	0	9	41	0	0	0	28	0	0
1621	64	144	217	0	42	60	0	38	57	0	0	0	36	0	0
1622	108	84	299	0	27	73	0	15	66	1	0	0	61	0	1
1623	144	119	307	0	24	53	0	27	62	0	0	0	56	0	0
1624	112	103	317	1	28	76	0	24	62	0	0	0	45	0	0
1625	73	66	246	1	14	57	1	9	73	0	0	0	42	0	0
1626	94	76	179	0	22	44	0	21	41	4	0	0	33	0	0
1627	70	42	176	0	11	37	0	9	39	1	1	0	36	1	0
1628	92	86	316	0	24	96	0	20	109	2	0	1	59	0	0
1629	81	63	258	1	11	64	1	20	54	0	0	0	22	0	0
1630	89	44	289	2	5	87	0	12	66	0	0	0	20	0	0
1631	95	86	297	0	21	72	0	23	73	0	1	0	49	0	0
1632	105	85	285	1	23	69	0	15	62	1	0	0	42	0	0
1633	107	86	308	2	24	74	1	18	76	0	3	0	48	2	0
1634	104	118	203	0	25	45	1	32	51	2	3	0	46	0	1
1635	97	106	202	0	17	54	1	31	71	0	0	0	44	4	0
1636	426	417	—	0	37	—	0	29	—	0	106	—	155	3	—
1637	62	66	93	0	13	17	3	10	13	0	5	5	22	7	2
1638	85	112	190	3	16	52	2	29	43	0	7	1	26	5	0
1639	167	149	324	1	49	121	0	34	121	0	3	0	101	4	0
1640	—	71	316	—	14	93	—	19	64	—	0	0	—	2	6
合計	4516	4894	7741	291	985	1909	252	969	1792	69	179	15	1409	242	130

(注)　N＝聖ニコラス教区；J＝聖ジョン教区；A＝オールセント教区　　「少年・少女」等は「子」に含まれている。
資料：N.C.L., Parish Registersより作成。

同様に，「息子・娘」，あるいはごく少数現われる「少年・少女」，「子」といった添え書きもまた，首尾一貫性をもった用語だったとは考えられない。この呼称はどれくらいまでの年齢層を含むものだったのだろうか。そもそもこの呼び方は年齢に関連したものだろうか，それとも年齢とは直接関係なく，単なる親族（親子）関係を示すだけの呼称なのだろうか。後者であるとすれば，「息子・娘」には，理論的には，独立するのに十分な年齢に達した成人の男女も含まれている可能性がある。さらに推論を重ねれば，成人でありながら独立せず，両親と同居している者——既婚・未婚を問わず——もこの範疇に含まれていたとも考えられる。だがイギリスの人口史，家族史の常識からすれば，この推論は妥当とはいえまい。[10] 両親との成人の同居や三世代以上同居の家族はまれなイギリスの一般的な家族形態，さらに奉公の慣行が普遍的であったこの国では，そうしたケースは，あったとしてもごく例外的なものだったと考えるほうが常識的だからである。[11] とすれば，「息子・娘」の少なくとも大部分は，成人に達しない人口からなっていたと見てさしつかえないだろう。[12]

この点はいくつかの事実からも間接的に立証される。一つは，女性のなかになんの添え書きもない被埋葬者がいずれの年にも相対的に多数いることである。成人男子には職業名が記されるのに対し，女性にはそれがないのが通例である。しかし，もし「娘」が単に親族（親子）関係を示す呼称であったとすれば，教区牧師はなぜ，どのような基準で，「妻」でも「未亡人」でもない女性を，あえて「娘」と，なんの添え書きもない女性とを区別して記録したのだろうか。成人に達しながら両親と同居

10) Laslett (1983), chap.4 ; ラスレット (1986)，第4章参照のこと。

11) 奉公に出るのに決まった年齢があったわけではないが，多くは10代前半に家を離れたとみてよかろう。中野 (1994)，76-7ページ。

12) Finlay (1981), p.123; Schofield and Wrigley, (1979), p.87 も同様な結論である。スコフィールドとリグリーはさらに大胆に，1～9歳の死亡率はそれ以上の年齢の青年や若い成人よりずっと高いこと，それ以上の年齢では奉公に出ている可能性が高いことを理由に，教区簿冊の「息子」や「娘」は10歳以下の幼い子供を指す，と推定している。

している女性（そのために「娘」に分類された）が，同じ境遇の男性よりもはるかに多かった，というありそうもない仮定にでも立たないかぎり，「娘」という添え書きは年齢に関係がある，つまりは成人に達しない女性を指す言葉であったと考えるのが常識的であろう。

第１表を一瞥しても，このことは了解される。一般に「幼児」の埋葬数が多い時には，「息子・娘」の埋葬数が極端に少なく，逆に「幼児」の少ない時には「息子・娘」の数が非常に大きい。このことは，教区牧師がこのふたつの範疇を通常は区別せず――時には区別することもあったかもしれない――交互に用いたことを強く示唆している。換言すれば，「息子・娘」は（少なくともその多数は）「幼児」と同じ年齢層とみなされる者，つまりは成人に達しない「子供」を指す言葉であったことになる。

その他の言葉，「子」，「少年・少女」といった，比較的まれにしか記されていない表現の正確な意味も不明だが，これらが成人以外の年齢層を指すことはまちがいあるまい。とすれば，「息子・娘」，「幼児」にこれらの範疇を加えたものは，埋葬簿における非成人人口，あるは「子供」の年齢層の全体を指す，と考えてよかろう。第２表Ⅰ，Ⅱ，Ⅲは，第１表をもとに，この「子供」の10年ごとの埋葬数と，埋葬総数に対するその比率を整理したものである。

全体として「子供」の埋葬比率は著しく高く，子供の死亡は平均してこの時期の埋葬総数の48％に達している。10年平均で見ても，1580年代までの聖ニコラスが30％台であったのを別にすれば，どの教区でも，どの時期でも40％以上であり，多い時には50％を超えている。この時代を通じて，この都市で埋葬される者のほぼ半分近くは「子供」だったのである。

この数値は一般的基準に照らしてみればどのように評価さるべきなの

第2表　ニューカスルの「子供」の埋葬(要約)

	(I) 埋葬数総計			(II) 「子供」総計			(III) 「子供」埋葬数／埋葬数 %			(IV) 「子供」埋葬数／洗礼数 %		
年	(N)	(J)	(A)	(N)	(J)	(A)	(N)	(J)	(A)	(N)	(J)	(A)
1576/80	168			65			38.69			39.39		
1581/90	596	450		223	214		37.42	47.55		50.56		
1591/00	504	789		258	386		51.90	48.92		54.08	69.93	
1600/10	542	721	1415	284	371	708	52.40	51.45	50.03	48.54	44.86	55.52
1611/20	534	811	1502	216	365	674	40.45	45.00	44.87	39.27	44.35	38.49
1621/30	927	827	2604	425	405	1278	45.85	48.97	49.07	58.13	51.40	50.05
1631/40	1245	1296	2218	551	634	1186	44.26	48.91	53.47	59.37	54.28	47.95
計	4516	4894	7741	2022	2375	3846	44.77	48.52	49.68	52.15	54.51	47.76

(注)　N＝聖ニコラス教区; J＝聖ジョン教区; A＝オールセント教区
資料：N.C.L., Parish Registersより作成。

だろうか。現代の人口学的指数と比較すれば当然ながらこの数値は異常に高い。しかし注2)にも触れたこの時代の子供年齢層の厚さと低い平均余命を考えれば，この数値は予想しうるところでもある。一つの目安を示しておこう。スコフィールドとリグリーはモデル生命表を用いて，平均余命(e_0)75歳の現代型人口と37.5歳の前近代型人口の二つのケースを例示している。[13]　定常的人口の場合，前者では80歳以上の死亡が死亡総数のほぼ半分(49%)を占め，0歳から9歳までの子供の死亡は2.4%を占めるだけである。これに対し，後者ではこの数値はまったく逆になり，それぞれ6.7%，34.4%となる。ニューカスルの「子供」がどの年齢層まで含むか不明なので正確な数値の比較はできないが，近代以前の基準から見れば，50%弱という埋葬比率が格別に異常な数値でないことはとりあえず了解できよう。

この範囲内で，10年ごとの平均値で三つの教区とも高い「子供」の埋

13)　詳細は次の通りである。

年齢層	定常人口の場合		年1%で増加する人口の場合	
	e_0＝37.5	e_0＝75	e_0＝37.5	e_0＝75
0～9	34.4	2.4	37.5	75.0
80～	6.7	48.4	4.1	42.1

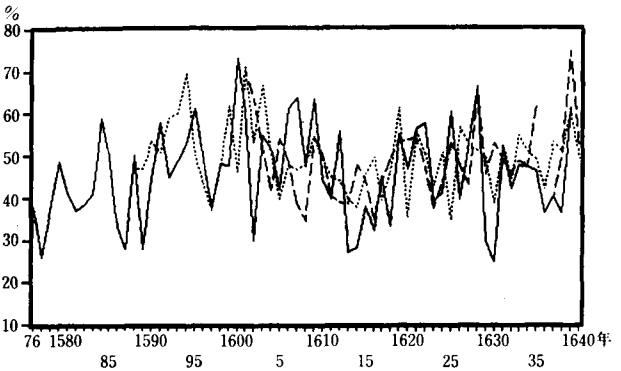
Schofield and Wrigley (1979), p.61.

葬率を示しているのは，1601～10年代であり，いずれも50%を超えている。オールセント教区では1630年代に53.4%ともっとも高い数値を示しているが，これは事実を反映するよりも，資料の不足のためオールセント教区のこの時期の数値からは1636年の大疫病を除外した結果生じた統計操作上のものかもしれない。同じ時期，他の教区，聖ジョン教区と聖ニコラス教区はそれぞれ48.8%，44.2%と相対的に小さな数値に留まっている。1601～10年が相対的にもっとも多くの「子供」が死んだ時期であったといってよさそうに思われる。この10年のニューカスルは，小さな疫病流行にはたえず見舞われたが，80年代末から90年代にかけてのような大流行は見られなかったし，飢饉からも免れた時期だった。[14] こうした比較的「健康な」時代に，「子供」の埋葬比率はむしろ相対的に高まった。逆に，データの少ない1570年代を別とすれば，これが低いのは，死亡率危機を少なくとも2度経験した1580年代である。

この点をもっと詳しく吟味するために，三つの教区の埋葬比率を年ごとに追ってみたのが第1図である。教区によりその変動の幅は異なり，1600年，1625年の聖ニコラス教区と聖ジョン教区，1616年，1635年のオールセント教区と他の2教区のように，対照的な動きが見られる年もないわけではないが，全体として三つの教区の子供の埋葬比率はほぼ併行した動きを示しているといってよかろう。興味深いのは，グラフのいくつかのピークが疫病流行以外の年に見られることである。特に顕著なのは，90年代の危機とも呼ばれる時期である。埋葬数が激増した1987年，89年の二つの年には聖ニコラス教区の「子供」の埋葬比率は20%台に急落しているし，1596～8年にかけての飢饉をともなう危機の時代にも，その率は低い水準にあり，最悪の年であったはずの1597年には40%以下にまで低下している。「子供」の埋葬比率のピークはむしろ，こうした危

14) 疫病の年代譜については，中野（1995），104-18ページを見よ。

第1図　ニューカスル3教区の「子供」の埋葬比率



資料：N.C.L., Parish Registersより作成。

機の年に続く年度に見られる。典型的には90年代危機の後の数年である。聖ニコラス教区の埋葬比率は1600年に，聖ジョン教区はその1年後に，70%を超える信じがたいほどの率に達している。1639年にも，特にオールセント教区で70%を超える率を記録しているが，これもこの期間中最悪のペスト禍に見舞われた1636年の「後遺症」を示すものと考えられるかもしれない。[15)]

同様に粗雑な数値であるが，第1表(D)欄には「死亡率」を評価する別の指数として，10年後ごとの「子供」の埋葬数と洗礼数の比率を示しておいた。死亡した「子供」に対する新生児の比率であるこの数値（その逆数）は，人口の「再生産率」のごく大雑把な代替指標と解釈することもできる。この数値からは，埋葬数だけから見たのとは違った問題点が浮かんでくる。この比率が教区ごとに埋葬比率とは異なった動きを見せていることである。特に聖ニコラス教区とオールセント教区との対比

15)　これは「子供」の死亡率が上昇したためよりは，疫病により「淘汰」された健康な「大人」の死亡率が相対的に低下したことによるかもしれない。本文，後述も参照せよ。

が興味をひく。「子供」の埋葬比率では少なくとも1610年代以降，オールセント教区は常に聖ニコラス教区のそれを上回っている。だが逆に，この「子供」の埋葬数／洗礼数比率は，この頃より後者の数値が前者のそれを上回っている。教区の性格から判断すると，これは一見意外な印象を与える。聖ニコラス教区は都市指導者や大商人の住む比較的富裕な教区，オールセント教区はこれと対称的に，水夫や運搬労働者が大量に住む人口の密集する貧しい教区である。[16] 「子供」の死亡率は後者のほうが相対的に高かったと予測するのが自然だろう。にもかかわらず，埋葬／洗礼比率は前者のほうが高いのはどのように説明すべきなのだろうか。[17]

統計的に立証するのは困難だが，これには次のような可能性を考えてみることができる。一つは，オールセント教区が，古い中心地，聖ニコラス教区以上に人口変動の大きい教区であったことと関係がある。洗礼数の著しい増加傾向——40年ほどのあいだに2倍以上にも増えている——に窺われるように，オールセント教区は急速に膨張を遂げつつある教区だった。この拡大は自然増加ではなく，移入民の急増により担われたと考えるべきだろう（聖ニコラス教区との洗礼数の差の拡大を，両教区の自然増加率の違いのみによって説明することは非現実的である）。しかも石炭産業の急成長に応じて，これら移民の多くはおそらく肉体労働に向いた比較的若い年齢層，つまり高い出産力をもつ人々であったろう。[18] このタイプの移民の増加により出生数の水準がたえず——聖ニコラス教区よりも急速に——引き上げられたこと，別のいい方をすれば，新たな移民による洗礼数の「追加分」が相対的に大きかったことが，「子

16) 教区の特徴については，中野（1995），103-4ページ。
17) ただし，1630年代のオールセント教区からは，疫病の大流行の見られた1636年が資料不足のため除かれているので，この年代のこの教区の比率の低さは誇張されている。
18) 水上運搬夫，水夫等の多くが近郊地域からの移民からなり，この教区にもっとも集中して住んだことについては，中野（1995），174ページ。

供」――それには例えば親と同居する10歳前後までの子供も含まれている――の埋葬数と出生数の比の相対的小ささを説明する一つの要因であると考えられる。

もう一つの考えうる要因は，オールセント教区の「子供」数の相対的な少なさである。これもこの教区の貧しさ，移動性の高さと関係がある。大人たちばかりでなく，貧しい世帯の多いこの教区では，男の子であれ女の子であれ，子供たちは早くから教区を離れて奉公や徒弟に出された。つまり少なくとも奉公に出る年齢に達した（早ければ8～9歳以上の）子供に関するかぎり，この教区では，「子供」の移動性が相対的に高く，あるいはその定着率が低く，したがって子供（の年齢層）が相対的に小さかった可能性がある。これに対し，富裕な聖ニコラス教区の子供たちは，比較的長く両親のもとに留まっただろう。それだけでなく，この教区の富裕な商人や手工業者たちは，オールセント教区のような貧しい教区の子供を徒弟や奉公人としてより多く受け入れただろう。[19] 換言すれば，オールセント教区は奉公年齢より以上の「子供」の比率そのものが相対的に小さい教区だった。これが「子供」埋葬数／洗礼数比率の小ささになって現われている，という可能性も考えられる。

以上で観察されたことは，同時代の他の都市と比べてどのように評価されるのだろうか。次に他の都市の例を検討してみよう。

---

19) もっとも，奉公人数の教区ごとの違いを立証することは困難である。教区簿冊で「奉公人」と記されている者（男性のみ）は234人いるが，そのうちの54%はオールセント教区の教区民だった（N.C.L., Parish Registers)。だがこれは聖ニコラス教区の教区簿冊が17世紀以降，ほとんど職業名を付していないためであり，実際，この教区にどれくらいの奉公人，とりわけ女性の奉公人がいたかは不明である。またオールセント教区の奉公人の多くは若い奉公人（いわゆるライフ・サイクル奉公人）ではなく，生涯奉公人（多くが大人）であった可能性もある。ロンドンの教区を検討したフィンレィは，疫病時，貧しい教区と違って富裕な教区では10～19歳の年齢層がもっとも大きな打撃を受けたとした上で，この年齢層には奉公人・従弟と，疫病に弱い若い新移民が大半を占めていたことを指摘する。Finlay (1981), pp.129-30.

(二)

近世における乳幼児の死亡率に関しては，リグリーとスコフィールドの大著を初めとしていくつかの精密な研究が発表されている。都市の子供の死亡についての研究は立ち後れてはいるが，[20] ごく少数ながら家族復元にもとずく研究成果もある。だがこれらを検討する前に，前節で用いたと同様な資料に言及した成果を紹介しておこう。

その例もきわめて少ないが，一つにパリサーのヨークに関する研究がある。この都市の1教区，Belfrey教区について，著者は次のようにいう。1571～86年のあいだにこの教区で埋葬された466人のうち，136人（29.2%）は1歳以下，66人（14.2%）は1歳から10歳以下，23人（4.9%）は11歳以上20歳以下で死亡した。つまりこの間の死亡総数の48.3%は21歳の成人に達しない「子供」の死亡であり，大人の埋葬は全体のおよそ半分だった。[21] ニューカスルの「子供」を20歳以下の未成人全員を含むと仮定すれば，この高い数値は，ニューカスルのそれとほぼ同程度である。ヨークはニューカスルとはかなり異なった経済的特性をもった都市ではあったが，1万人ほどの人口を抱えたこの地域の中心地的都市だった。またこの頃のヨークは疫病の流行から免れた比較的「健康な」都市でもあった。[22] このことは，大きな地方都市の「ノーマルな」時期には，50%を時には大きく超える程度の「子供」の埋葬比率が通例であったことを示唆する。

しかしより小さな都市では状況はやや異なっている。次の第3表は，

20) ロンドンについては，年齢別死亡率に関するフィンレィの精緻な研究がある。Finlay (1981), chaps. 5, 6. また対象とする時期がずれるため本稿では検討を控えたが，ごく近年の次の文献はロンドンの死亡表(Bills of Mortality)を用いて，乳幼児のみならず死亡率全般にわたる広範な問題をあますところなく論じている。Landers (1993), esp. pp.98-100.

21) Palliser (1979), pp.119-20. 16世紀ヨークのもっと高い子供の死亡率に関する推計値は，Cowgill (1967), pp.56-60.

22) Palliser (1979), pp.122-7; 中野 (1995), 98, 118ページ。

第3表　ルドロウの乳児・子供・大人の埋葬

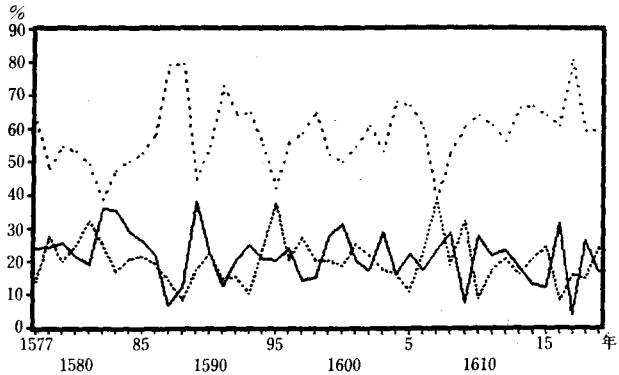
年	乳児 (infant)	「子供」 (child)	「大人」 (adult)	計	乳児 %	「子供」 %	乳児＋「子供」 %
1577/79	26	23	59	108	24.70	21.30	45.30
1580/89	199	170	534	903	22.04	18.83	40.86
1590/99	163	181	481	825	19.76	21.94	41.70
1600/09	151	186	437	774	19.51	24.03	43.54
1611/19	144	128	471	743	19.38	17.23	36.61
計	683	688	1982	3353	20.37	20.52	40.89

資料：Schofield and Wrigley (1979), p. 85より作成。

スコフィールドとリグリーが引用したシュロップシャ，ルドロウ（Ludlow）の埋葬簿を要約・整理したものである。著者によれば，ここでいう「幼児」とは1歳以下の「乳児」を，また「子供」は教区簿冊で「息子」，「娘」と添え書きされているものを指すとされているから，この数値はニューカスルの例と直接比較することができる。乳児を含めた「子供」の埋葬比率は，時期によっては45%近くに達することもあるが，全体として見ればこの数値は40%をわずかに上回る程度で，ニューカスルやヨークの場合と比べるとかなり小さい。人口規模が小さく比較的停滞的な（人口増加率の小さい）こうした農村的都市では，「子供」の埋葬比率は，大きな地方都市よりはかなり――5%程度――低かった，といえそうである。

ルドロウの例は，前節のニューカスルの事例と比較するのにもう一つ興味深い論点を提供する。乳児，子供，大人の三つの変数の変動の違いがそれである。第2図は，総死亡数に対するそれぞれの比率の変化を辿ったものである。もっとも注目すべきは，乳児と大人の動きで，二つは対称的な変動を見せている。特に顕著なのは疫病時である。通例は80人を下回る程度のこの小都市の埋葬数が100人を超えた年は，1587年，1597年，1609年，1613年と4回あり，それぞれ191，133，152，100人にまで増加した。だがこれらの時期のいずれにおいても，「乳児」の死亡数は13，9，11，18人と平年（17人以下）並みか，かえって減少さえ見せ，埋葬

第2図　ルドロウの埋葬比率



— 幼児　---「子供」　･･･「大人」

資料：第3表に同じ。

総数に占めるその比率はそれぞれ6.8，14.3，7.2%（平年は20%程度）と大幅に低下している。子供（9歳以下と推定されている）の動きはむしろ大人のそれに近く，この三つの年，それぞれ27，36，49，16人と，最後の年を除いて平均を大きく超えているが，大人の増加ほど顕著ではなく，死亡総数に占めるその比率は平年をやや上回る程度——1587年，1613年にはむしろ減少している——であった。したがって，乳児と子供を併せた「子供」の死亡総数に占める比率も，疫病時にはむしろ低下している。疫病の影響は（種類の違いによって，あるいは飢饉との連動の違いにもよって）同じではなかったが，いずれの時期でもその最大の犠牲者はまず大人であり，ついで子供，もっとも打撃を受けることの少なかったのは，乳児だった。[23)]

これはニューカスルについての観察とおおむね整合する結論である。ニューカスルでも疫病時には「子供」の埋葬比率はむしろ低下したが，ルドロウの例から類推すれば，この低下はなによりも1歳未満の乳児の

23)　Schofield and Wrigley (1979), pp.84-8.

比率低下によるものだった可能性が高いといえよう。[24)]

埋葬数を単純にカウンティングした研究とは直接比較することはできないが，子供の死亡に関する問題は家族復元を行なえばもっと正確に解明できることはいうまでもない。都市について家族復元による分析を行なった研究もいくつか発表されているが，ここでは二つだけ紹介しておこう。

その最初の試みの一つとして，A. ダイヤーのウースター市に関する研究がある。この都市では教区簿冊の利用できるようになる1560年代，洗礼を受けた者の約45%は成人に達する前に死亡した。この比率は1575～84年には30～35%に低下したが，1590年代には50%以上に跳ね上がった。1630年代前半にはこれは20%以下に下がるが，後半には再び50%を超える水準に上昇している。このうち，1歳未満の乳児の死亡率(洗礼数100当り）は，1570年代に5～10%の底に達して後増加傾向を示し，1610年代前半には約30%のピークに達した。その後は10%から20%の水準を上下している。1歳以上24歳までの「子供と若者」の動きはこれとやや異なっており，1560年代から1599年まで，80年代前半を除いて25～35%の高い水準にあった死亡率は，1600年代に入って急落し，1620年代前半と30年代後半に20%を超えたのを別とすれば，15%以下であり，特に1610年代後半，30年代前半には10%を下回っている。二つの年齢層をあわせた未成人（子供と若者）全体で見ると，1560年代に50%に近い水準

24) 同様な分類によって，ロンドンの4つの教区について1593, 1603, 1625年の疫病時を検討したフィンレィの研究でも，危機死亡率(平年の埋葬数に対する疫病時の埋葬数の比)が断然高くなったのは「子供」であったことがわかる。Finlay (1981), pp.123-4. スラックもロンドンの3教区と農村の2教区の例から，疫病時に埋葬の比率が急増したのは，5～19歳の年齢層であり，5歳未満と50歳以上の年齢層の埋葬比率は低下，29～49歳の層は平年並であることを指摘する。その上で，疫病の最大の犠牲者は5歳以上の子供と若者であり，これは「疫病学者の観察と一致する」と主張する。Slack (1986), pp.181-2. しかしこれはこの年齢層の死亡率が増加したことをただちに意味するわけではない。フィンレィはさらに生命表を用いて疫病時のより正確な年齢別死亡率を推定し、教区ごとに違いはあるが，それが年齢とともに低下したことを立証している。Finlay (1981), pp.126-9. 本文後述のライの例を参照せよ。また Cf. Hollingsworth (1971), p.135.

にあった死亡率は70年代に30%以下に減少する。その後はしだいに増加して90年代に50%を超える頂点を記録し，1630年代後半に55%に近いピークを迎えるまで低下傾向を辿っている。20%以下の目立って低い時期は1610年代後半と30年代前半である。[25)]

ウースターで埋葬数が急増した（おそらく疫病の流行した）年は1580, 87, 93, 1609, 24, 37年である。これらの年を含む時期にはいずれも子供の死亡率は高い水準にはあるが，1580年代後半と1630年代後半を除き，格別に高いわけではない。むしろ乳児の死亡率も「子供と若者」のそれも，ピークはそれぞれ1610年代前半，1590年代後半と，疫病を免れた比較的「健康な」時期に重なっているのは興味深い。

家族復元を用いて都市の子供の死亡率を分析したより新しい事例には，テュダー朝サセックス州の都市ライに関する研究がある。第4表はその成果を転載したものである。

第4表　ライの乳幼児死亡率

年度	洗礼数	1歳未満 埋葬数	1歳未満 %	1～9歳 埋葬数	1～9歳 %	10～21歳 埋葬数	10～21歳 %	0～21歳合計 埋葬数	0～21歳合計 %
1540-9	424	66	15.6	89	21.0	47	11.1	202	47.6
1550-9	638	104	16.3	227	35.6	40	6.3	371	58.2
1560-9	613	125	20.4	126	20.6	41	6.7	292	47.6
1570-9	545	111	20.4	119	21.8	22	4.0	252	46.2
1580-9	631	72	11.4	112	17.7	61	9.7	245	38.8
1590-9	656	120	18.3	136	20.7	9	1.4	265	40.4
1600-9	572	65	11.4	72	12.6	2	0.3	139	24.3
計	4079	663	16.3	881	21.6	222	5.4	1766	43.3

資料：Mayhew (1987), p. 194より転載。

まずこの表は，1540年から1609年までの70年間に乳幼児・子供の死亡率には顕著な変動があったことを明らかにしている。まず21歳までのすべての「子供」の死亡率から見てとりわけ目につくのは，1550年代の著しく高い比率である。この10年，出生した（洗礼を受けた）子供のほとんど三分の二近くが21歳の成人になる前に死亡した。以後，死亡率は低

25) Dyer (1976), pp.40-1.

下傾向を示し，90年代に一時的に上昇した後，17世紀初めには四分の一以下の水準にまで低下している。著者によれば，50年代の異常に高い水準はインフルエンザと疫病流行によるもの，1600年代の低い率はこの時期の経済不況と人口減少により人口圧からの一時的開放があったことによる，と説明される。[26)]

しかし第4表は，より詳細な年齢別で見ると，それぞれの死亡率の動きには違いがあったことも明らかにしている。50年代の死亡率が異常に高いのは1～9歳の幼児であり，この年齢層の死亡率の急騰が「子供」の死亡率を異例な水準にまで高めた要因であったことがわかる。これに対し，乳児死亡率の頂点は60～70年代になってから達成されている。この二つの年齢層には1600年まで死亡率の目だった改善傾向は認められない。改善の方向がはっきり現われているのは，10～21歳の子供である。この年齢層の死亡率は80年代に一時的増加みせるものの，40年代から低下傾向を辿っている。

疫病時における乳児とその他の年齢層における死亡率の変化の違いは，この表からは十分読み取れない。ライでは1532, 40, 44, 56, 63, 77, 79～80, 96～7, 98, 1604, 1625年に疫病が流行した。そのうち特に厳しかったのが，1544, 63, 79～80, 96～97年で，通常はせいぜい100前後の埋葬数であったのが，それぞれの時期，436, 779, 813, 510人にまで跳ね上がった。[27)] しかし疫病の打撃が大きかったと思われる1570年代，90年代にも，乳児や9歳以下の幼児の死亡率は相対的に低下した証拠はないし，むしろこの時期に低下しているのは，10～21歳の子供の死亡率である。

ライの研究が提示するもう一つの興味ある結論は，富のランクによる乳幼児死亡率の違いである。下層と中層のあいだにはほとんど差は見ら

26) Mayhew (1987), pp.195-6.
27) Ibid., pp.45-7.

れないが，上層とは違いがあった。すなわち1540～1609年を通じて，中・下層の1歳未満の乳児の死亡率は16.6%であったのに対し，上層では14.6%，1～9歳の幼児の場合には，それぞれ21.8～22.2%と19.8%だった。[28] この差はかならずしも有意なものとはいえないかもしれないが，より人口稠密な都市では，これはもっと大きかった可能性がある。例えば，テュダー朝期ヨークに関するパリサーの研究は，乳幼児死亡率について次のような指摘を行なっている。洗礼後12ヶ月以内に死亡した「乳児（infant）」の粗(普通)死亡率は教区の富裕度（課税台帳により判明する）にほぼ逆比例し，富裕な教区では159（1000人当たり），貧しい教区では264から280にものぼり，顕著な対比を示している。[29] この差は都市の規模や性格の違い（例えば，ルドロウよりヨークのほうが，貧しい層は衛生環境のより悪い「スラム化」した地域に住む傾向が強かった）にも関係があるかもしれない。

(三)

このような他の地方都市の研究に照らしてみる時，ニューカスルに関する事例の考察はどのように位置付けられるのだろうか。いうまでもなく，資料の精度も分析方法も異なるこれらの成果を単純に比較することには大きな危険を伴う。なによりも，ニューカスルの資料で考察した「子供」の年齢層が不明なことは重大な欠点である。この点を留意した上でなら，次のような推論を展開することが許されるだろう。

まず一般的にいうなら，乳幼児の死亡率が18世紀まで改善されなかったことはいまや十分正確に知られている。[30] これらは主に農村に関す

28) Ibid., p.194-5.
29) Palliser (1979), pp.119-20.
30) Wrigley and Schofield (1981), pp.249-50; Jones (1980), pp.239-50. ジョーンズは17世紀後半，農村では乳児死亡率が低下したことを指摘する。Ibid., pp.244-6.

る研究をもとにした結論であるが，本稿で言及した都市でもまた，どこであれ――ライは10～21歳の子供の死亡率が低下傾向を見せた例を提供しているが――テュダー朝後半の時代に，少なくとも9歳以下の子供の死亡率が顕著な低下を示したことを示唆する証拠はない。

埋葬数の比率は「死亡率」を表わすものではもちろんないが，定常的人口（増加も減少もせず，年齢構成も不変）を仮定すれば，そのおおよその代替値と見なすこともできよう。とすれば，50%に近い「子供」の埋葬比率を示すニューカスルの例は，ヨークの同様な数値とともに，一般に高い子供の死亡率という状況のなかでも，とりわけ高かった可能性がある。しかしこの仮定が非現実的であることも明らかである。どの指標をとってみても，ニューカスルのどの教区の人口も増加傾向にあったことは疑いない。そうであれば，ニューカスルの相対的に高い「子供」の埋葬率は，死亡率そのものの高さよりもむしろ，他の都市以上に高い人口の自然増加率，その結果として，相対的により多くの若い年齢層の人口をもっていたためであるかもしれない。

だが都市の環境のもとで高い自然増加率を予想するものまた非現実的な仮定である。[31] 人口増加の大部分はまちがいなく移民の流入により達成された。この時代のニューカスルの移入民の規模，ましてや彼らのあいだでの年齢構成や死亡率について知る手懸かりはほとんどない。しかし一般に移民の――ひいてはおそらくその「子供」の――死亡率は定住人口よりも高いとされるし，[32] ニューカスルに関してもこれを推測させる間接的な証拠もまったくないわけではない。[33] とすれば，この都市の高い「子供」の埋葬比率は，潜在的に高い出産力と高い乳幼児死亡率をもつ貧しい新移入民の多さによって説明するのがもっとも妥当に思わ

31) 都市の自然増加の可能性についての議論は，次の参照せよ。Sharlin, (1978).
32) 例えば，Slack (1985), pp.181-2; Clack and Souden (1987), p.23.
33) 中野 (1995)，151-5ページ。

れる。

移動の少ない人口についてこそ有効な家族復元分析が明らかにできないのは，まさに人口のこの部分である。家族復元によったウースターやライの例に見られる相対的に低い子供の「死亡率」と，移民人口も含んでいるニューカスル（およびヨーク）の高い子供の埋葬比率のあいだの差は，一部はこの計算方法の違いによるものであろう。前者の場合でも，もし移民とその子供の死亡が考慮に入れられたなら，おそらくもっと高いものになったはずである。だがこの差が計算方法の違いだけによるものだとも考えにくい。同じ種類のデータで計算したルドロウの「子供」の埋葬比率は，ニューカスルやヨークよりもかなり低い数値を示しているからである。

ヨークはともかく，ニューカスルのような拡大しつつある「大」都市の経済的状況のもとでは，ウースターやライ以下の中小都市と比べて，「子供」の高い死亡率を傾向的にもつ移民が実際により多くかつ恒常的に存在した，と考える根拠は十分ある。石炭取引きの興隆により急激な成長と遂げた当時のニューカスルには，富を蓄えた富裕市民の奉公人，なによりも石炭運搬等の肉体労働力に対して例外的に大きな需要をもっていた。こうした需要に応えて移入した新移民は，多くが若く貧しい年齢層からなっていた。そのなかには，例えば独立への道を歩み始めたばかりの「子供」や，適齢期の若者が多く含まれていただろうし，家族で移動した者の多くも，出産期間を終えていない若い夫婦であったと考えられる。[34] 彼らのうち，成人に達していない「子供」の多くは富裕な市民

34) ニューカスルの運搬労働者の主体をなしたキールマンと同様な水上運搬に従事したロンドンのウォーターマンについて，次のような興味深い研究がある。1629年，サザークの一地区の17歳以上のウォーターマン(男子)355人中，34.4%は24歳以下，51.8%は29歳以下と，他の地域と比べて著るしく若い年齢構成であった。こうした若者は「17世紀初頭の首都の年々の移民総数の大きな部分をなした。」もっとも，彼らが世帯を形成する年齢は，他の地域と比べて大きな差はなかった。Boulton (1987), pp.151-61.

世帯の「ライフ・サイクル奉公人」になったであろうし，成人の多くは肉体労働者として人口稠密で衛生状態の悪い地域や家屋に住むことになっただろう。こうしたタイプの移民の多さが，この都市の「子供」の埋葬比率を押し上げた，唯一ではないが，おそらく最大の要因であった，と見ても無理な推論ではあるまい。

一般的に高い水準にある「子供」の埋葬比率は，疫病時にはむしろ低下した。しかし他の都市からの類推でいえば，その程度と内容は教区ごとに違っていた。「子供」のなかでももっとも疫病の打撃が相対的に小さかったのは，1歳未満の乳児であり，疫病時の「子供」の埋葬比率の低下は，おそらくこの年齢層の死亡率の相対的低下によるところが大きかった。これに対し，10代の「子供」，つまり奉公に出始める年齢の子供は，疫病の打撃をもっとも深刻に受けた。オールセント教区と聖ニコラス教区のあいだに認められる人口学的指標のパフォーマンスの相違は，一方で若く貧しい成人労働力をもっとも多く受け入れる教区，他方で多くの徒弟や「子供」の奉公人を抱えた教区という，教区の社会・経済的性格の違いに，その説明の少なくとも一部は求めることができる。

繰り返し述べたように，不正確な資料の単純な分析をもとにした本稿での議論は，あくまでも guess-work にすぎない。ここでの暫定的な結論は，さらに良質の資料と緻密な分析により検証されねばならない。だがとりあえず前工業化都市における子供について，次の基本的な事柄がこれまで以上に具体的に確認されたなら，本稿の最低限の目的は達成されたこととしよう。

ラスレットのいうように，確かに農村だけでなく前工業化都市も子供の溢れた社会であった。だが同時にこの社会は，平常時にはことに，子供の死に溢れた社会でもあったのである。

資料

Newcastle Central Libray (N.C.L.)
transcripts of parish registers of
St Nicholas
St John
St Andrew
All Saints

引用文献

Boulton, J. (1987). *Neighbourhood and Society: A London Suburb in the Seventeenth Century* (Cambridge U.P.: Cambridge).

Clark, P. (1985). 'Migrants in the city: the process of social adaptation in English town', in Clark and Souden (eds.), pp.267-91.

Clark, P. and Souden, D. (1985). 'Introduction', in Clark and Souden, (eds.), pp.11-48.

Clark, P. and Souden, D (eds.) (1987). *Migration and Society in Early Modern England* (Hutchinson: London etc.).

Corfield, P. (1976). 'Urban develpment in England and Wales in the sixteenth and seventeenth centuries', in D.C. Coleman and A.H. John (eds.), *Trade, Government and Economy in Pre-industrial England* (Weidenfeld and Nicolson: London), pp.214-47.

Cowgill, U.M. (1967). 'Life and death in the sixteenth century in the city of York', *Population Studies,* XXI, no. 1, pp.53-62.

Dyer, A.D. (1973). *The City of Worcester in the Sixteenth Century* (Leicester U.P.: Leicester).

Finlay, R. (1981). *Population and Metropolis: The Domography of London 1580-1650* (Cambridge U.P.: Cambridge).

Hollingsworth, M.F. and T.H. (1971). 'Plague mortality rates by age and sex in the parish of St. Botolph's without Bishopsgate, London, 1603', *Population Studies,* XXV, pp.131-46.

Howell, R. (1967). *Newcastle upon Tyne and the Puritan Revolution* (Oxford at the Clarendon Press: Oxford).

Jones, R.E. (1980). 'Further evidence on the decline in infant mortality in pre-industrial England: North Shropshire, 1561-1810', *Population Studies,* XXXIV, no.2, pp.239-50.

Lander, J. (1993). *Death and the Metropolis. Studies in the Demographic*

History of London 1670-1830 (Cambridge U.P.: Cambridge).

Laslett, P (1983). *The World We Have Lost: Further Explored* (3rd edition) (Macmillan: London): ラスレット著；川北稔・指昭博・山本正訳『われら失いし世界：近代イギリス社会史』(三嶺書房, 1986).

Mayhew, G. (1987). *Tudor Rye* (Falmer: Sussex).

Palliser, D.M. (1979). *Tudor York* (Oxford).

Schofield, R. and Wrigley, E.A. (1979). 'Infant and child mortality in England in the late Tudor and early Stuart period', in C. Webster (ed.), *Health, Medicine and Mortality in the Sixteenth Century* (Cambridge U. P.: Cambridge), pp.61-95.

Sharlin, A. (1978). 'Natural decrease in early modern cities: a reconsideration', *Past and Present,* No.79, pp.126-38.

Slack, P. (1985). *The Impact of Plague in Tudor and Stuart England* (Routledge: London etc.).

Wrigley, E.A. and Schofield, R. (1981). *The Population History of England 1541-1871: A Reconstruction* (Cambridge U.P.: Cambridge).

グベール, P. 著；遅塚忠躬・藤田苑子訳(1992). 『歴史人口学序説. 17・18世紀ボーヴェ地方の人口動態構造』(岩波書店).

中野忠(1994). 「近世イギリスの徒弟制——最近の研究動向から——」(『早稲田社会科学研究』, 第49号), 67-107ページ.

中野忠(1995). 『イギリス近世都市の展開——社会経済史的研究』(創文社).

安元稔(1981). 『イギリスの人口と経済発展』(ミネルヴァ書房).